

NHKアナウンサー
山根基世



ことばで

「私」を

育てる

ことばで「私」を育てる

山根基世

講談社

著者略歴

一九四八年、山口県防府市に生まれる。早稲田大学文学部英文学科卒業。一九七一年、NHKに入局。NHK大阪放送局勤務を経て、一九七四年よりNHKアナウンス室（東京）勤務。「関東甲信越・小さな旅」「日本・出会い旅」「はんさむウーマン」などの番組を経て、現在は「土曜・美の朝」（総合テレビ）や「ラジオ深夜便」（NHK第一放送、第四土曜日）を担当している。

著書に『であいの旅』『歩きながら』（以上、文春文庫）、『日本列島幸せ探し』（講談社）、『ネコのあぶく』（毎日新聞社）などがある。

ことばで「私」を育てる

一九九九年十二月八日 第一刷発行

著者——山根基世^{やまねもとよ}

装幀——福島 治

装画——沖野雅明

©Motoyo Yamane 1999, Printed in Japan

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



発行者——野間佐和子 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二—二一 郵便番号一〇二—八〇〇—

電話 編集〇三—五五九—五三八 販売〇三—五五九—五六五 製作〇三—五五九—五二五

印刷所——大日本印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。

なお、この本についてのお問い合わせは生活文化Dあてに願います。

ISBN4-06-20998-5（生活文化D）

定価はカバーに表示してあります。

はじめに

二十八年間、NHKでアナウンサーとしてことばにかかわる仕事をしてきた。そのうちの五年間は旅番組で全国津々浦々を歩き、数えきれないほど大勢の人に会った。長年その土地に暮らし、一つのことをしつづけている人たちからは、その風土その経験からしか語れない真実のことばを聞くことができた。町や村の片隅でそんなことばを聞くととき、「ああ、人間っていいな」と心底感動することが多かった。

そしてこの七年間、「土曜・美の朝」という美術番組で三百人近いアーティストにインタビューしてきた。昨日よりは今日、今日よりは明日、よりよい自分になって、少しでもよい作品を創ろうとしているひたむきな彼らのことばは、私の胸に沁み、人間の生き方について教えられる気がしている。いま、私は仕事をすればするだけ自分の中に満ちてくるものがあるのを感じている。

私は、こうして出会った人々の「ことば」によって育ててもらっているのだと、つくづく感謝する気持ちになる。

しかし、長年一つの組織で仕事をしていれば、そんなときばかりではない。ことばが凶器のように思えた時期もあった。若い間は「女の子」として扱われることに傷ついたし、中年になればなつたで、今度は責任ある場に立たされながら、その役割を果たす力の足りない自分に苦しんだ。

組織の壁、男社会の壁に頭をぶつけ、深い傷を負いながら学んだのは、自分の思いを実現するためには「感情的にならず、論理的に、しかも人の心に届くことば」で発言する能力が、ぜひとも必要だということだ。そのためには若いうちから自分の中に、だれからの借り物でもない、自分自身の体験から得た「自分のことば」を育てていくことが大切だと痛感した。

あのときあんな物言いをしなければ、もう少し配慮のある言いまわしをしていれば、一言感謝の気持ちを伝えていたら、状況はずいぶん違ったものになっていただろうと、反省することも多い。しかし、私にとつてはもはや過ぎてしまったこと。とりかえしはつかない。だからこそ、あとにつづく女性たちに伝えたいのだ。私が何に苦しみ、何に悩み、いまそのことをどう反省しているのかを。

私が悩んだ同じ悩みを、次の世代も一から同じように悩むのでは、私が仕事をつづけてきた意味がないではないか。もちろん次の世代には次の世代の、また新しい悩みも生まれるだろう。しかし少なくとも、私がぶちあたった壁はうまく避けて、その一歩先から踏み出してもらいたい。ことば一つで、無駄な消耗をしなくてすむこともあるのだ。

そんな願いをこめて、あえて恥多（きど）い私の体験も曝（さら）した。自分らしく生きたいと一生懸命が

ばっている女性たちの参考に、少しでもなれば、こんなにうれしいことはない。

たった一言が命取りになるような閣僚の発言がつづいている。ああしたことを聞きたびに、へ口は心にあふれるものを語るゝものだということを改めて思う。いいことばの語り手になるには、結局、自分で自分の心を豊かに育てていくしかない。

そして、心を育ててくれるのもまた「いいことば」なのだ。これまでに会った人々から聞いたあのことば、このことばが、どれほど私を育ててくれたことだろう。

ことばは心の栄養剤。これからも、いいことばをたくさん聞いて、「自分のことば」を育て、もう少しマシな「私」になっていきたいと思っている。

一九九九年十月

やまねもとよ
山根基世

目次

はじめに 1

第一章 ことばの重みに気づくとき

ほころび 14

からだ
身体のことばが聞きたい 17

「好いちよるけん」 20

ことばを支えるもの 22

大きな財産 26

「本当のことば」を聞く喜び 30

か
もく
寡黙な人、饒舌な人 34

「ありがとう」の効用 38

第二章 ちよつと真面目なことばの知識

「読む」にも基本がある 46

「書きことば」と「話しことば」 49

第三章

話しことばの不思議 52

伝えたいと思うから 54

腰で読む 57

子どもと上手に話したい 60

アナウンサーの商売道具 65

声は心を映す鏡 68

電話の声 70

バイリンガルでなくても 74

理のことば、情のことば 78

よみがえ
蘇る名アナウンス 86

世間はことばで回っている

うまい叱り方できますか? 94

たかが敬称、されど敬称 99

大切なのは「ことばのセンス」 102

素直な気持ちで 105

第四章

仕事に負けないことばを磨く

「世間話」のすすめ 110

性格のきつい人との付きあい方 115

せせら笑い 118

大人の女の条件 122

ことばで伝えてこそ 125

手で書くということ 129

奇妙な商売 134

女性の古くて新しい悩み 137

友だちが上司になる日 140

飲み友だち 142

会議の技術 145

会議必勝法(1)“女らしさ”を捨てる 148

会議必勝法(2)如才なく 152

リーダーシップの第一条件 156

第五章

ことばから広がる情景

とても簡単なセクハラ防止法 160

仕事か、子育てか 163

嫉妬心をやっつける 166

私は挨拶する 174

まず、声に出そう 178

男も変わらなきゃ 181

ワイドショー考 184

あざやかな思い出 187

「じゃあ、またね」 190

よいことは連鎖する 194

最高のプレゼント 198

「生涯現役」 202

おいしかったわよ、の一言で

音のない会話 208

206

第六章 人を知り、ことばを知る

インタビュー 214

無念の眩き 217

敬語を超える愛 219

夢を織る 222

自然のことば 226

「努力」は近ごろはやらないけれど 230

書かなければ生きられなかった 233

「私だって人間だから」 241

生命を支える力 250

初出掲載誌 254

ことばで「私」を育てる

第一章 ことばの重みに気づくとき

ほころび

電車に乗って、一日一回驚かない日はない。

先日は、まだ十代とおぼしい若い女の子が、大あくびをしながら電車に乗ってきた。入り口のドアのところに立っていた私に、彼女の喉の奥、内臓まで見えそうな大口を向けるのである。かつて日本人は、とりわけ若い女性は、人前ではあくびはなるべくかみ殺したものだ。生理的にやむをえないときには、少なくとも口に手を当てたものだが……。

またある日、私の隣の座席に若い男性が座っていた。その前にお婆さんばあが立った。若い男性は急に居眠り体勢に入った。しかたなく私が立つと、お婆さんは当然という顔で、一言も口をきかず、押し退けるように私の座席に座った。

老いも若きも、男も女も、いったい日本はどうなっちゃってるんだろう……。

デパートを歩いていたら、馴染みの店員さんが私を呼び止める。私のスカートの裾すそがほころびているというのである。マサカと思ったが、見れば本当に半分近く裾が落ちている。知らずに、だらしない恰好かっこうで歩いていたのだ。

恥ずかしさと同時に、怒りがこみ上げた。なにしろこのスカート、私の持っている衣装の中